

## 世阿弥の幼名「鬼夜叉」と竹田権兵衛広貞

おもて あきら

世阿弥の幼名が藤若だったことは『申楽談儀』によって早くに知られていた。それが二条良基の命名であることが判明したのは、福田秀一氏が『芸能史研究』第十号(昭和40年7月)に紹介された「自二条殿被遣尊勝院御消息詞」によってである。彰考館文庫蔵『山のかすみ他』に合写されていたこの文章は、藤若の美貌と才能を礼讃し、彼を見出した足利義満の目の高さをも讃えた内容であるが、本文の末に、「本云」と肩書して、底本にあった次のような付記をも写している。

私云、藤若者、大和猿楽観世大夫子、鬼夜叉也。尊勝院同道、参二条殿之時、被改藤若云々。(資料A)

誰がいつ頃添えた付記か明らかでないが、①藤若の名が二条良基の命名であること、②それ以前の名が鬼夜叉であったこと、の、従来知られていなかった二つの事を示唆する内容である。このうちの①が事実であることは、すぐ明らかになった。伊地知鉄男氏が『国文学研究』第35集(昭和42年3月)に翻印された

崇光上皇の宸記『不知記』の永和四年一三七八四月廿五日の条に、良基邸での連歌に猿楽観世の垂髪が参加して佳句を詠んだ旨を記し、その垂髪の児が十三歳で二条良基の所へ参上した際に藤若の名をもらった由が明記されていたからである。「今年十六才歟」という世阿弥生年を考える上での重要な記事も同じ条にあって、研究者には衆知のことである。

Aが示唆する二つの事項の一つが真実であったことは、もう一つの事項もまた事実であることを思わせる。だが、安易な類推は禁物であり、それなりの吟味が必要であろう。

藤若以前の世阿弥の幼名が鬼夜叉だった可能性を思わせる例として、福田氏は、世阿弥の先輩喜阿弥(亀阿)の芸名がもと亀夜叉であったことを指摘しておられる。夜叉号が芸名に用いられていた一例で、一見有力な傍証と見えるが、私は逆にマイナスの資料として受け取っている。なぜなら、『申楽談儀』に名に見える夜叉号の芸人が、23段の亀夜叉(亀阿)序段の松夜叉(高法師)、25段の花夜叉・

藤夜叉など、みな田楽で、猿楽の役者が一人もいないからである。例の貞和五年一三四九の勸進田楽棧敷崩れの模様を伝える『太平記』の記事にも、新座の彦夜叉の名が見える。座名不詳の松夜叉以外はみな新座であり、新座独得の芸名だったのかも知れない。いわば同業者だった父の観阿弥が、そうした田楽新座専用の芸名に近い夜叉号を自分の息子の幼名に付けた可能性は、あまり強くないのではあるまいか。「鬼」「夜叉」と、上も下も恐ろしげで、魔除けなどの民俗学的説明は可能であるが、十二歳以前の可憐な児の名にふさわしくない点も、いささか気になる。

一方、世阿弥の幼名が鬼夜叉だった事を思わせる材料もある。後代の観世大夫の何人かの幼名が鬼若だった事実がそれである。浅野栄足編の『観氏家譜』が四世観世大夫政盛・五世之重・六世元広・九世身愛の小名(幼名)をみな「鬼若丸」としているのは、そのままには信じ難いが、六世元広と九世身愛の幼名は確かに鬼若だった。中院通秀の『十住院内府記』文明十六年一四八四正月二日の条に、

大雪。…鬼若・長若等来。観世子共也。

とあり、同書には以後しばしば鬼若の名が見える。翌十七年二月六日の条には「鬼若来、為薪能罷下、云々」とあるし、長享二年一四八八正月二日には「鬼若童」と記録されている。

当時の観世大夫は五世之重であり、その子供で薪能にも参勤している鬼若は、長男の六世元広に相違あるまい。また十代だったはずで、「鬼若童」も鬼若自身のことであろう。九世身愛(黒書齋暮閑)の幼名が鬼若だったことは、享和二年一八〇三の観世大夫由緒書にも見え、比較的著名である。20歳の天正十三年一五八五に書写した謡本「夕顔」(観世宗家蔵)には、まだ「鬼若書之」と署名している。

六世・九世の幼名がともに鬼若だった事實は、観世大夫家が「鬼」を嗣子の幼名用の字として重視していた事を思わせ、それが世阿弥の幼名鬼夜叉に由来するのであれば、最も理解し易い。藤若以前の幼名が実は鬼若だったのではないかとの疑問を抱かせるものの、Aが示唆する②が事實だったことを思わせるプラスの材料と言えよう。

結局の所、マイナスの材料とプラスの材料の軽重を量りかね、世阿弥幼名鬼夜叉説を肯定すべきか否かに迷っているのが私の現状である。どちらかといえ、①が事実だけに②をも肯定したい気持が強いが、自信を持ってない。解説的文章で「幼名、鬼夜叉・藤若」などと肯定的に書くのは、初めから藤若ではなかったことを示したい気持からである。

ところで、福田論文以前に世阿弥幼名鬼夜

叉説を唱えていた人物がいる。竹田権兵衛広貞一六七六、一四二五である。広貞は加賀藩の能大夫竹田権兵衛家(京都住で御所に出入した。初代安信は金春大夫氏勝の子)の三代目で、学究肌の人だったらしく、正徳五年谷口七左衛門刊『歌舞名物同異抄』(猿楽の歴史、猿楽と能の差を説く)や、私家版らしい『徳華問答鈔』(享保元年跋。能が正楽たる所以を説く)の著者として名高い。『歌舞名物同異抄』刊行後に補遺の作成を意図していたようで、般若窟文庫にその稿本が数冊伝存する。その中の一冊の「第四さるがく法師の事」の条に、

又、室町殿の観阿弥・世阿弥・音阿弥事ハ、格別の義なり、彼時ハ、一藝有者童朋として近習に召仕ハる、由。此三代ハ能を以て童朋に召れけると也。世阿弥ハ幼名鬼夜叉と云しを、二条殿下良基公の藤若と改給ふよし也。絵に能阿弥・藝阿弥・相阿弥有がごとし。蒔絵に幸阿弥、筋に體阿弥、刀研に本阿弥有。此外も猶有べし。(資料B)

とある。傍線部がAと同内容の発言であり、同朋説の間にはめこまれた形なのは、そこだけ他書からの借用であることを思わせる。そうした疑問から同じ般若窟文庫の竹田家関係文書を探索しているうちに、広貞の子の新五郎勝信筆らしい『戊戌雜秘録』(戊戌は享保三